

6. 大学院における全学的観点からみた回答の傾向

(1) 2011（平成 23）年度の全体的傾向

2011（平成 23）年度、大学院授業評価アンケート集計結果を全学的に分析した結果、以下のような傾向が見られた。

1) 全体的に見ると、「授業の内容を理解できた」「授業の内容に興味・関心をもてた」「授業中に使う教材は適切であった」「成績評価の仕方が明確に示されていた」「教員は学生の反応や理解を見ながら授業を進めた」「私はこの授業に満足した」「私は履修科目を選ぶ際にシラバスをよく読んだ」「授業中は意欲的・積極的に取り組んだ」「自習室、研究設備等、学内の学習環境は、十分に整備されている」といった、ほぼ全ての項目について、学生評価の平均の増加が見られた。しかし、これらの結果は、平均が 0.1～0.49 の微増であり、前年度よりも改善の傾向が見られるとは言え、更なる授業内容や方法についての見直し、工夫の必要があることを示している。また、「教員は学生の質問や相談に適切に対応した」については、経年比較で変化が見られなかったが、81.4%の学生が「そう思う」と答えていることから、高い満足度が維持されていることがわかった。

2) 平均が 3.7 以上の評価が高い項目について見てみると、「授業の内容に興味・関心をもてた」について 80.7%の学生が「そう思う」と答えており「そう思わない」は 0%であった。「教員は学生の質問や相談に適切に対応した」については、(1)に記述した通りである。「授業中に使う教材は適切であった」「教員は学生の反応や理解を見ながら授業を進めた」「私はこの授業に満足した」「自習室、研究設備等、学内の学習環境は、十分に整備されている」は、いずれも 70%以上の学生が「そう思う」と評価している。しかし、どの項目も約 20%の学生が、「どちらかと言えばそう思う」と答えており、「自習室、研究設備等、学内の学習環境は、十分に整備されている」については、「どちらかと言えばそう思わない」あるいは「そう思わない」と答えている学生が 1.6%いるため、今後、改善の余地があることを示唆する結果となっている。

3) 一方、平均が 3.5 未満の評価の低い項目については、「私は履修科目を選ぶ際にシラバスをよく読んだ」が「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」をあわせて 17.8%学生が答えており、「成績評価の仕方が明確に示されていた」が「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」という答えがあわせて 10.0%という結果になっている。「授業中は意欲的・積極的に取り組んだ」も、2.1%の学生が「どちらかと言えばそう思わない」と答えている。その原因が、教員や授業の側にあるのか、学生自身の問題にあるのか定かではないが、全体の評価の高さから考えると、学生の中に、授業についていけない者、授業内容に不満を持つ者、研究に主体的に取り組む意欲に欠ける者がいることなどが予想される。このような少数の、問題を抱えた学生に対する支援体制作りも、本学大学院の課題としてあげられる。

3) あなたについて

⑦私はこの授業に満足した

全学（大学院）の平均は3.7であった。「人間文化研究科」「人間文化専攻」「生活福祉文化専攻」は3.8と平均を上回っていたが「応用英語専攻」は3.4と、やや低めであった。「心理学研究科」は、3.7であった。

⑧私は履修科目を選ぶ際にシラバスをよく読んだ

全学（大学院）の平均は3.2と、他の項目より低めであった。「人間文化研究科」は3.7で、「人間文化専攻」は3.4と、平均を上回っていたが「応用英語専攻」は3.7、「生活福祉文化専攻」は、3.3と、「応用英語専攻」の数値が高かった。「心理学研究科」は、3.1と、最も低かった。

⑨授業中は意欲的・積極的に取り組んだ

全学（大学院）の平均は3.7であった。「人間文化研究科」は3.7で、「人間文化専攻」は3.8、「生活福祉文化専攻」は3.7であった。「応用英語専攻」は3.5と、やや低めであった。「心理学研究科」も3.6と全学平均よりやや低めであった。

4) 教育環境について

⑩自習室、研究設備等、学内の学習環境は、十分に整備されている

全学（大学院）の平均は3.7であった。「人間文化研究科」は3.6で、「人間文化専攻」「心理学研究科」は、3.8と全学平均よりやや高めであった。「応用英語専攻」は3.5、「生活福祉文化専攻」は、3.4とやや低めであった。

以上が各項目の今年度の傾向である。

文責：田中 誉樹（心理学研究科 准教授）